

カール・カウツキーがイディッシュ語を  
「墮落したドイツ語」と呼んだのは何故か  
——歴史学と社会言語学の架橋への寄与（二）——

勝 又 章 夫

カール・カウツキーがイディッシュ語を  
「墮落したドイツ語」と呼んだのは何故か  
——歴史学と社会言語学の架橋への寄与（二）——

勝 又 章 夫

## Why Karl Kautsky Called Yiddish a Corrupted German?

KATSUMATA, Akio

### Abstract

In his essay of 1908 “Nationalität und Internationalität” Karl Kautsky called Yiddish that the Jewish people in eastern Europe spoke, a corrupted German. A Japanese Linguist interpreted this statement as follows; Yiddish can appear corrupted from the viewpoint that German should be beautiful. Although Kautsky’s mother was of German origin and his mother tongue was German, his father was Czech, and he did not forget his Czech origin and did not surrender to the German nationalism. Moreover, because of his Bohemian pronunciation he was contemned as a Jew in his childhood in Vienna. It is not probable, that such a person insults Yiddish as a corrupted German from the viewpoint that German should be beautiful. His statement cannot be understood as a compromise to Antisemitism. While a lot of social democrats in the second half of the 19<sup>th</sup> century compromised with the antisemitism, Kautsky considered the antisemites uncompromisingly to be the most dangerous enemy. His statement about Yiddish can be understood only from his own theory of nationalism. In his opinion a nation is a linguistic community. In his theory Jewish people, which did not have a common national language cannot be regarded as a nation. Therefore, Kautsky regarded Jews not as a nation but as a class, that was concentrated on commerce and intellectual occupations. Because the Jews do not constitute a nation, but a class, what they speak cannot be a language, but a corrupted German as a non-language.

*Keywords:* Karl Kautsky, Yiddish, Jargon, Corrupted German, Sociolinguistics, Jewish Question

## 要 旨

第二インターナショナル時代の代表的マルクス主義者カール・カウツキーは東欧ユダヤ人の言語イディッシュ語を「墮落したドイツ語」と呼んだことがある。日本の言語学者田中克彦によると、「美しいドイツ語」という規範の意識からするとイディッシュ語は墮落しているように見えるという。果たしてこのように解釈することができるだろうか。「美しいドイツ語」という規範の意識を持つためには、ドイツ・ナショナリストではないとしても、少なくともドイツ人としての民族意識は必要であろう。しかしカウツキーは「チェコ人でもあり、ドイツでもある」という二重のアイデンティティを選択し、ドイツ・ナショナリズムに屈することもなかった。カウツキーの発言はユダヤ人に対する反感に由来するわけでもない。反セム主義に妥協する社会民主主義者が少なくなかった時代にカウツキーは反セム主義を「最も危険な敵」と看做し、私生活においても妻をはじめ、多くのユダヤ人と良好な関係を築いていた。カウツキーがイディッシュ語を「墮落したドイツ語」と呼んだ原因はカウツキーの民族理論にあると思われる。カウツキーにとって民族とは言語共同体であった。しかし彼はユダヤ人を民族ではなく階級と看做すようになる。ユダヤ人が民族ではなく階級であるとすれば、彼らが話しているのは、民族言語ではあり得ない。そこで東欧ユダヤ人の言語は「非言語」としての「墮落したドイツ語」と呼ばれたのである。

キーワード：カール・カウツキー、ユダヤ人問題、イディッシュ語、社会言語学、田中克彦

## 目 次

- I. イディッシュ語のイメージ
- II. カウツキーの民族意識
- III. カウツキーと反セム主義
- IV. カウツキーの民族理論とユダヤ人
- V. おわりに

### I. イディッシュ語のイメージ

1908年、第二インターナショナル時代の代表的なマルクス主義理論家カール・カウツキー [Karl Kautsky: 1854-1938] は論文「民族性と間民族性」において東ヨーロッパのユダヤ人の言語、イディッシュ語を「墮落したドイツ語」verdorbenes Deutschと呼んでいる。<sup>1)</sup> 社会主義者の間でもイディッシュ語の評価は分かれていたとはいえ、この発言は奇妙である。言語を資本主義的發展の付随現象とみなしていたカウツキーは言語の価値を主として経済的観点から評価し、美的観点からする言語の評価はカウツキーの思想に疎遠だからである。例えば、資本主義的發展に伴って国際的交流が増大すると、国際的な交流手段としての「普遍言語」が求められるようになると論じた際、カウツキーは何語が普遍言語になるにせよ、「その言語に勝利をもたらすのは経済的な理由であって、文法や響きは無関係だろう」<sup>2)</sup> と主張している。

カウツキーの発言の歴史的背景を理解するために、イディッシュ語がどのようにイメージされ

てきたか、概観しておきたい。イディッシュ語を今日ドゥーデンの『イディッシュ語辞典』は次のように特徴づけている、「イディッシュ語はドイツ語に最も近い西ゲルマン語である」と。<sup>3)</sup> 同様に『イディッシュ ある言語の冒険』の著者ザルツィア・ラントマンも「イディッシュ語は中世高地ドイツ語から生まれたドイツ語の隣接言語である」と述べている。<sup>4)</sup> また高名なイディッシュ語研究者ゾロモン・ビルンバウム [Solomon Birnbaum: 1891-1989] はイディッシュ語の呼称を検討し、「ジャーゴンという呼称は適切ではない」と主張しただけでなく、「墮落した言語」という呼称も許容できないという。「墮落」は「醜さ」を含意するが、美的判断は主観的であり、「墮落した言語の話者にとってそれは美的に満足できるものに思われる」からである。<sup>5)</sup> このように今日イディッシュ語はドイツ語に似てはいるものの、別個の独立した言語と看做されており、「ジャーゴン」や「墮落した言語」とも看做されてはいない。

しかしイディッシュ語は初めからこのような自立した言語としての地位を認められていたわけではない。マックス・ワインライヒ [Max Weinreich: 1894-1969] が指摘しているように、18世紀末にドイツのユダヤ啓蒙主義によって「ジャーゴン」という呼称が導入されると、この強く侮蔑的な意味を持つ呼称は、文明化したヨーロッパの純粋な言語に対するイディッシュ語の「墮落」を強調することになった。<sup>6)</sup> もちろん誰もがイディッシュ語を非難したわけではない。ハインリヒ・ハイネ [Heinrich Heine: 1797-1856] は「ヘブライ語を織り込まれ、ポーランド語で仕上げられたドイツ語」を話すポーランドのユダヤ人をドイツのユダヤ人よりも遥かに高く評価するという。<sup>7)</sup> これに対して18世紀のユダヤ人解放思想から市民的改善論を継承したユダヤ人手工業促進協会の綱領文書としてレヴィ・ラツァール・ヘルヴィッツ [Levi Lazar Hellwitz: 1786-1860] が1819年に起草した『ドイツにおけるイスラエル人の組織』においては、「イスラエル人とその教育をゆがめるユダヤ方言が根絶されるように教師は配慮しなくてはならない」と要求されていた。<sup>8)</sup> 同様に、著名なユダヤ人説教師アドルフ・イエリネク [Adolf Jellinek: 1821-1893] は『オリエント』誌に寄せた論文「オーストリアのユダヤ人」において以下のように「ジャーゴン」を厳しく非難している。「ユダヤ人のジャーゴン、ユダヤ人とキリスト教徒の間に割り込むこの敵対的な力、過去の抑圧と過去の隔離の悲しむべき遺産、言語的に混乱させ、多くの災厄を引き起こす悪魔は、ユダヤ人がキリスト教徒の学校でドイツ的な授業を受けるならば、消滅するであろう。ユダヤ人のジャーゴンに対してはどれほど戦っても十分ということはない。」<sup>9)</sup> ゾロモン・ビルンバウムは「ジャーゴン」という呼称を「民族的な自虐」に帰しているが、<sup>10)</sup> この呼称は19世紀末のシオニストによっても使用されていた。政治的シオニズムの指導者テオドル・ヘルツル [Theodor Herzl: 1860-1904] は、将来のユダヤ人国家における「主要な言語はドイツ語になる」<sup>11)</sup> と考えており、イディッシュ語には冷淡な態度を取った。ヘルツルは1896年に刊行したシオニズムの宣言書『ユダヤ人国家』において、こう述べている。「今日我々が用いている委縮し押しつぶされたジャーゴン、このゲットー言語という習慣を我々は捨てるだろう」と。<sup>12)</sup> またゾロモン・ビルンバウムの父であり、東ヨーロッパのユダヤ人の民族的・言語的権利を擁護し、チェルノヴィッツ言語会議を主催したナタン・ビルンバウム [Nathan Birnbaum: 1864-1937] でさえ、イディッシュ語をしばしば「ジャーゴン」と呼んでいた。1890年には「ユダヤ人のジャーゴン」という論文を発表し、イディッシュ語を厳しく批判している。ユダヤ人のジャーゴンは「いまだにまったく非有機的な構成にとどまっており、その墮落したヘブライ語の構成部分は、墮落し脱ドイツ化されたドイツ的基礎から甚だしく際立っている。ジャーゴンには言語の統一的性格が欠けている」というのである。<sup>13)</sup> 1896年バーゼルの第一回シオニスト会議においてもビルンバウムは「ユダヤ人民の4分の3をなすのはジャーゴンを話すユダヤ人である」と述べているが、<sup>14)</sup> ビルンバウムは「ジャーゴン」という呼称にもはや

侮蔑的な意味を込めてはいない。後にビルンバウムは自己批判的に述べている。「学生のジャーゴン、船員のジャーゴン」というものはあるが、民族の言語を「ジャーゴン」と呼ぶことはできないと。<sup>15)</sup>

社会主義者たちも東ヨーロッパのユダヤ人とイディッシュ語にはしばしば侮蔑的な態度を取った。レーニン [Владимир Ильич Ленин: 1870-1924] は、ユダヤ人労働者を「無権利状態の民族」<sup>16)</sup> と呼び、ユダヤ人が民族であることを認めたこともあるが、ユダヤ人労働者がロシア社会民主党内で民族的に自立した組織を形成することは認めず、ロシア・ユダヤ人という別個の民族の言語は「ジャーゴン」であり、領土は「ユダヤ人居住区」だと述べてリトアニア・ポーランド・ロシア・ユダヤ人労働者総同盟「ブンド」を嘲笑した。<sup>17)</sup> これに対してブンドは、周知のように、イディッシュ語で大衆宣伝を行うために、1895年、ジャーゴン委員会を設立した。<sup>18)</sup> マックス・ワインライヒによると、「ジャーゴン」という呼称は東ヨーロッパに導入されると、侮蔑的な意味は失われ、「中立的な呼称」として使われたという。確かに、ユダヤ人の言語はジャーゴンであるとレーニンが主張したとき、そこに侮蔑的な意味が込められていたことに疑いはないが、ブンドにとって「ジャーゴン」という語は侮蔑的な意味を持たない中立的な語だったのではないだろうか。<sup>19)</sup>

ハプスブルク帝国においてもイディッシュ語の評価は分かれていた。ガリツィア出身のユダヤ人社会主義者でコロミアのストライキを組織したマックス・ツェッテルバウムはイディッシュ語に批判的で、次のように述べている。「ジャーゴンは完成度が低く、その文学はあまりにも貧弱であって、高次の精神的諸問題や開花した純文学の美しさを読者に伝えることはできない」のだから、「ジャーゴンは代替物にすぎない」と。<sup>20)</sup> このような立場にガリツィア・ユダヤ社会民主党の指導者ヘンリク・グロスマン [Henryk Grossman: 1881-1950] は激しく反発し、次のように述べている、「800万から900万の人間によって話され」、「マルクスの『共産党宣言』と『資本論』、『エルフルト綱領』、カウツキーの『社会革命』等々が読まれることばが言語ではないというのか?」と。<sup>21)</sup> それだけではない。様々な学問や文学作品をイディッシュ語で読むことができるようになったユダヤ人労働者は「もはや自分のジャーゴンを恥じていない」という。<sup>22)</sup> ガリツィア・ユダヤ社会民主党はイディッシュ語の国家承認を求めていた。それがイディッシュ語を教育言語とする公立小学校に礎を与えると考えられたからである。<sup>23)</sup> このような要求を厳しく批判したのがオーストリア社会民主党のオットー・バウアー [Otto Bauer: 1881-1938] である。バウアーはイディッシュ語を「ジャーゴン」と呼び、<sup>24)</sup> ユダヤ人の言語は「墮落している」verkommenと主張しただけでなく、<sup>25)</sup> 「ユダヤ語」、すなわちイディッシュ語を「教育言語とする学校のユダヤ人児童について考えてみたまえ、どんな精神がこの学校を支配するだろうか」と述べて、<sup>26)</sup> 嫌悪を隠さなかった。

このような態度はバウアーに限られなかった。ロバート・ウイストリッチによれば、オーストリア労働運動の指導者たちは「イディッシュ語、ゲッター文化とユダヤ人大衆の後進性への軽蔑」を共有していたという。<sup>27)</sup> それがユダヤ人社会主義者との確執を生んだとしても驚くにはあたらない。それはユダヤ人の民族性とイディッシュ語の法的地位をめぐる裁判に関する論争に表れた。ユダヤ人の法律家マックス・ディアマン트가チェルノヴィッツに「ユダヤ劇場」なる団体を設立する旨を内務省に届け出た際に、書類をイディッシュ語で書いて提出したために、内務省はそれが帝国議会に代表される諸王国並びに諸領邦において領邦の習慣的言語ではないという理由で、受付を拒否した。ディアマン트는国家基本法19条によって保障された諸民族の平等が内務省によって侵害されたと帝国裁判所に訴えたが、裁判所の判決は内務省を支持した。判決によれば、ユダヤ人は国家基本法19条の意味における民族とは看做されず、従って言語権の主体とも看做され得ない、民族の言語と理解されるのは、当該民族の構成員すべてによって話される言語である

と。<sup>28)</sup> オーストリア社会民主党の機関紙『アルバイター・ツァイトゥング』はこの裁判を、奇妙なドイツ語が聴かれるブダペスト音楽堂の出し物に相応しいと嘲笑しただけでなく、イディッシュ語を「他の言語の単語と混合された墮落したドイツ語」と呼んだ。<sup>29)</sup> このような『アルバイター・ツァイトゥング』の態度はブンドの厳しい批判を招いた。『アルバイター・ツァイトゥング』は「インターナショナルな団結という極めて基本的な要求を足で踏みにじった」だけでなく、それは「民族自決のために戦う社会主義的ユダヤ人プロレタリアートに対する背後からの直接的政治的攻撃」に他ならないと。<sup>30)</sup>

カウツキーがイディッシュ語を墮落したドイツ語と呼んだのは、この裁判が行われた前年のことであり、カウツキーの発言の歴史的背景はおおよそ明らかであろう。それではカウツキーの発言はどのように理解されるべきなのだろうか。この発言を日本の言語学者田中克彦は次のように解釈している。『『美しい』ドイツ語を話す規範の意識』からすれば、イディッシュ語は「くずれていることになるのである」と。<sup>31)</sup> はたしてこのように解釈することができるだろうか。『『美しい』ドイツ語を話す規範の意識』を持つためには、必ずしもドイツ・ナショナリストである必要はないとしても、少なくとも自分がドイツ人であるという意識、ドイツ人としての民族意識は必要であろう。カウツキーにそのような意識があっただろうか。あるいは「墮落したドイツ語」という特徴づけはユダヤ人に対する差別的な意識から生まれたのだろうか。そこで本稿ではカウツキーの民族意識と反セム主義に対するカウツキーの態度、さらにカウツキーの民族理論を検討し、カウツキーにおけるイディッシュ語の位置づけを明らかにしたい。

## II. カウツキーの民族意識

カール・カウツキーは1854年、ドイツ人の母親とチェコ人の父の下にプラハで生まれた。カウツキーは自らの少年時代を回想し、こう書いている。「プラハにいれば自分をチェコ人と感じるということは思いつかなかっただろう。私はいつもチェコ語よりもドイツ語を上手に話していたのである。しかし私はウィーンでも長い間ドイツ語のプラハ風の発音を保持していた。そのため私はしばしば嘲笑されチェコ人と烙印を押されたのである。」プラハにおける少年時代カウツキーは自らをドイツ人と感じていたと推測されよう。しかし知人らが、チェコ人の迫害について語るのを聴くにつれて、「迫害に対する抵抗に尊敬に値するもの」を見るようになったという。<sup>32)</sup> カウツキーはチェコ人として嘲笑され、チェコ人の民族的迫害に対する抵抗に共感することでチェコ人としての意識を獲得したのだろう。自伝によると、彼の「最初の政治思想は民族理念」であり、それは「フス派的な極めて急進的なチェコ・ナショナリズムだった」という。もっとも彼の母の家庭はドイツ人であり、カウツキーの母語はドイツ語だったので、「一面的にチェコ民族派だったわけではない。」<sup>33)</sup> それでも「17歳になるまで熱狂的なチェコ・ナショナリスト」であり、「あらゆるドイツ人を宿敵と看做し、ドイツ人であることほど罪深いことはないと思っていた」<sup>34)</sup> という。カウツキーにナショナリズムを克服させたのはパリ・コミューンであった。パリ・コミューンを通じてカウツキーは社会主義インターナショナリズム、「民族に関心も理解も持たない思想ではなく、どの民族にも同じ関心と理解を持って接しようとする思想」<sup>35)</sup> に到達したのだという。「ドイツ人であることほど罪深いことはないと思っていた」少年時代を経て、パリ・コミューンを通じてインターナショナリズムに到達したというカウツキーが『『美しい』ドイツ語を話す規範の意識』を持っていたとは考えにくい。

少年時代のカウツキーがチェコ・ナショナリズムを抱いたとしても後にドイツ人に鞍替えした

ということはないだろうか。カウツキーのように言語を民族の指標とする立場からすれば、「言語を変更」することによって「民族性を変更」することが可能と考えられる。<sup>36)</sup>このような民族性の変更はオーストリアでは頻繁に起こっており、「オーストリアのドイツ人とスラヴ人は「同一もしくは近親の構成要素から成り立っていた」<sup>37)</sup>と言われたほどであり、事実それはカウツキーの身近でも起こっていた。カウツキーの母の知人カール・ヴィルヘルム・ポトゥツェクの母はプラハに暮らしチェコ語を学ぶことのなかったドイツ人女性だったが、ポトゥツェク自身は長女をボジェナと名付けるような熱狂的なチェコ愛国者となり、純粋なチェコ人地域に薬局を開き、チェコ語しか話さなかったという。カウツキーによれば、「このような民族性の変更はボヘミアでは極めて頻繁に起こった」という。<sup>38)</sup> そうだとすれば、カウツキーが父の民族から母の民族に乗り換えたとしても驚くにはあたらない。しかしカウツキーはチェコ系ないしスラヴ系の出自を忘れることはなかったようである。

1880年、若きカウツキーはロシア人、ポーランド人、セルビア人などのスラヴ系の学生を組織していたスラヴィア協会の催しに熱心に参加するようになる。彼らに引き寄せられたように感じたのは彼が出自からすればスラヴ人だったからであり、<sup>39)</sup> ロシアの事柄に関する彼の視点が鋭くなったのは、彼がチェコ系で、チェコ人とスラヴ人の本質を理解していたからだという。<sup>40)</sup> 1896年、チェコの社会民主主義者がチェコ語とドイツ語による理論誌の刊行を企てると、カウツキーは編集部へ書簡を送り「私自身チェコ系なのでますます皆さんの企図に共感」と書いている。<sup>41)</sup> カウツキーがスラヴ系のチェコ人としての出自を忘却も否定もしていないことは明らかであろう。しかもチェコ・スラヴ社会民主党のチェコ・ナショナリズムが厳しく批判された1911年のオーストリア社会民主党インスブルック党大会においてもカウツキーは「私はチェコ人でもあり、ドイツ人でもあります」<sup>42)</sup>と述べて、自分がチェコ系であることを隠そうとしなかった。

チェコ人としての意識を持ち続けただけではない。カウツキーはドイツ・ナショナリズムに対する批判的な態度を貫き続けた。『自伝』においてカウツキーは知人から聞いたチェコ人の抵抗運動の歴史が彼をチェコ・ナショナリズムに導いたと説明しているが、『ノイエ・ツァイト』に寄せたエッセイにおいては、カウツキーと同様にプラハで生まれ、ウィーンで学業を修了したオーストリア社会民主党の指導者ヴィクトル・アードラー [Victor Adler: 1852-1918] と自分自身を比較し、彼らがそれぞれチェコ・ナショナリスト、ドイツ・ナショナリストになった背景を歴史的に説明している。二人の民族思想を分けたのは普仏戦争とパリ・コミューンであったという。ビスマルクがドイツ人の民族的な英雄となったのに対して、スラヴ人のドイツ人嫌いがフランス人とその共和国への共感を燃え立たせたという。こうして、上述したように、パリ・コミューンと、パリ・プロレタリアートへの共感がカウツキーのチェコ・ナショナリズムを社会主義への関心に転化し、ここからすべての民族に同じ関心と愛情を抱くインターナショナリズムに到達したのに対して、1870年頃、ヴィクトル・アードラーにおいてはドイツ・ナショナリズムが優勢になったという。<sup>43)</sup> もっともアードラーのナショナリズムは、カウツキーによれば、「他の民族に対する暴力行為によって自民族の偉大さを促進しようとする原始的・暴力的なナショナリズム」ではなく、「学問、芸術、経済、政治上の業績を通じて他の民族より優位に立ち、敬意の念を呼び覚ます」「洗練されたナショナリズム」であったという。70年代になると、ビスマルク体制に対する敬意が減退する一方で、洗練されたナショナリズムを引き寄せたのはドイツ社会民主党であり、洗練されたナショナリズムがインターナショナリズムへの第一歩となる環境が生まれたという。<sup>44)</sup>

青年時代に歴史的に規定されていたカウツキーのインターナショナリズムとアードラーのドイツ・ナショナリズムはその後も彼らの間に政治的な齟齬を引き起こした。ドイツ学校協会で活動

し、「ドイツ人児童のスロヴェニア化やチェコ化を彼らに加えられた不正と看做している」<sup>45)</sup> というアードラーのドイツ・ナショナリズムをカウツキーは危険視し、アードラーを「党の外にある」者と看做したという。<sup>46)</sup> 日露戦争中の1905年、ウィーンの『アルバイター・ツァイトゥング』が「ボチョムキン号の乗員が抵抗を試みることなく降伏した」という誤報を掲載したことがあった。同紙がこの報道に「これこそが、とてつもない力の突発的な表出からみじめな虚弱さのなかでの弛緩へと至るスラヴ的動揺である」<sup>47)</sup> という論評を加えると、それをカウツキーは『ノイエ・ツァイト』において厳しく批判した。カウツキーはこのような論評が「ロシア革命の支持者に不安な印象を与える」だけでなく、それは「現代的な反社会主義的で無意味な人種理論の臭いを発しており、スラヴ人ほど多様な分子を含む民族集団はないにも関わらず、全スラヴ人の性格をでっち上げており、スラヴ人ならだれでもドイツ国粹派的な高慢さを嗅ぎつける」と主張したのである。<sup>48)</sup> カウツキーの厳しい批判に対してヴィクトル・アードラーはカウツキー宛の書簡において激しく抗議している。「君は数行の — 僕が知る限り — 他愛のない文章のために『アルバイター・ツァイトゥング』を本当にさらしものにしなくてはならなかったのか」と。<sup>49)</sup> これに対してカウツキーは次のように応じている。「スラヴ人の信頼のなさと不安定さに関する一節ほど僕を激昂させたものは久しくなかったのだ。おそらく個人的な契機も関与してはいた。僕もスラヴ系であり、僕も一緒に攻撃されたと感じたのだ」と。<sup>50)</sup>

カウツキーはどのような意味でドイツ人であり得ただろうか。彼の母親はドイツ人であり、彼は母語であるドイツ語をチェコ語よりも上手に話していた。しかし彼の父はチェコ人だったので、カウツキーは一面的にドイツ人になることはなかった。しかもカウツキーはそのプラハ・ドイツ語のためにチェコ人と看做され、チェコ人としての意識も培っていく。彼は「チェコ人でもあればドイツ人でもある」という二重のアイデンティティを選択し、このようなアイデンティティのおかげでドイツ・ナショナリズムに屈することはなかったのである。このようなアイデンティティを持ったカウツキーに「美しいドイツ語という規範の意識」を擦り付けるならば、カウツキーに無実の罪を着せることにはならないだろうか。そうだとすれば、カウツキーがイディッシュ語を「墮落したドイツ語」と呼んだ原因はドイツ人としての民族意識やドイツ・ナショナリズムの他に求めなくてはならない。

### III. カウツキーと反セム主義

カウツキーがイディッシュ語を「墮落したドイツ語」と呼んだ原因は、ユダヤ人に対するカウツキーの反感や反セム主義との妥協に求められないだろうか。事実、反セム主義者のなかにはユダヤ人の言語を攻撃した者もいたのである。例えばリヒャルト・ヴァーグナー [Richard Wagner: 1813-1883] は「ユダヤ人の話し方における音声表現は我々の耳にはまったく異質で不快に響く」と述べている。<sup>51)</sup>

カウツキーが少年時代チェコ・ナショナリズムを抱いていたことは彼自身自伝に記していることであり、カウツキーが「大ドイツ主義的な雰囲気屈することはなかった」<sup>52)</sup> ということは研究史において良く知られている。しかしユダヤ人問題、とりわけ反セム主義に対するマルクス主義者の態度は慎重に検討しなくてはならない。この問題に関しては、対照的な解釈が流布しているからである。問題の出発点はカール・マルクス [Karl Marx: 1818-1883] 自身である。マルクスは1844年の『独仏年誌』に発表した論文「ユダヤ人問題によせて」において「ユダヤ教の世俗の神は貨幣」であり、「ユダヤ教には今日の全般的反社会的要素」が認められると書いていた。<sup>53)</sup> この

ようなマルクスの一連の発言に基づきエドムント・ジルバーナーは「反セム主義がユダヤ人に対する敵意を意味するならば、マルクスは明らかな反セム主義者と看做され得るだけでなく、そのようなものと看做されなくてはならない」<sup>54)</sup>と述べ、社会主義には「反セム主義的伝統」<sup>55)</sup>があるとまで主張している。ジルバーナーはこの解釈に従い、カウツキーについても、カウツキーはユダヤ教を軽蔑していた、と書いている。彼の軽蔑は「洗練され、極めて寛大なそれであった、それでもそれは軽蔑であった」と。<sup>56)</sup>ジルバーナーの解釈で最も問題とされたのは、「反セム主義」の理解である。ラインハルト・リュールプはジルバーナーを次のように批判している。ジルバーナーの反セム主義の定義は「ユダヤ人に対する非友好的態度まで反セム主義と看做されるほど」拡大されている。このような定義では19世紀のドイツだけでなくたいのヨーロッパ諸国において反セム主義的ではないと看做され得るのは「社会の中の小さな周辺集団だけだろう」と。<sup>57)</sup>

ジルバーナーの社会主義における反セム主義的伝統という解釈に対してリュールプはこう述べている。「社会主義の組織労働者は、反セム主義に対してほとんど完全に免疫を持っていた唯一の大きな大衆層だった」と。<sup>58)</sup>もちろん反セム主義を厳密に定義しても反セム主義者と看做され得るような社会民主主義者がいたかもしれないが、それも歴史的な総合的判断にとって重要ではないとリュールプは言う。<sup>59)</sup>このような解釈を支える事実は少なくない。例えば、1881年1月11日、ベルリンの労働者は反セム主義に抗議するために集会を開き、そこで「ユダヤ人問題に対する労働者の態度」という決議を採択し、次のように主張した、ドイツの労働者の「正義感と民主主義的精神は憲法によってユダヤ人に保証された国家公民としての同権の制限に抵抗せざるを得ない」と。<sup>60)</sup>ドイツ社会民主党の政治的指導者も反セム主義に断固反対した。1881年の選挙に際して反セム主義政党キリスト教社会党のアドルフ・シュテッカー [Adolf Stöcker: 1835-1909] が取引を持ち掛けたことがある。社会民主党が革命路線を放棄するならキリスト教社会党は社会主義者鎮圧法に反対するというのである。しかしベーベル [August Bebel: 1840-1913] とリープクネヒト [Wilhelm Liebknecht: 1826-1900] は、「我々には買収された3万票よりも誠実に獲得した3千票が好ましい」<sup>61)</sup>と述べて、反セム主義との取引を拒否した。さらに1883年のベルリン市議会議員選挙において社会民主党はユダヤ人の会社経営者パウル・ジンガー [Paul Singer: 1844-1911] を擁立したのである。その目的は社会民主党が反セム主義とは一切関係がないということを示すことであり、ジンガーもその意味を明確に自覚していた。ジンガーは次のように演説している、「私が候補者になるということは労働者が将来も万人の平等を高く掲げるとい確信を与えてくれる」と。<sup>62)</sup>これらの事実はリュールプの解釈を支持するように見える。しかしジルバーナーの解釈だけでなくリュールプの解釈も一面的なのである。反セム主義に対するドイツ社会民主党の理論家の発言には単なる失言を越えた問題が存するからである。

それを明らかにするためにも反セム主義から検討しなくてはならない。反セム主義とは1873年に始まる大恐慌を背景として成立したユダヤ人迫害運動である。その特徴は、この運動の初期の代表的論客ヴィルヘルム・マル [Wilhelm Marr: 1819-1904] が述べているように、「ユダヤ人に対する宗教的な憎悪」や「人種の憎悪、民族的憎悪」に基づくのではなく、<sup>63)</sup>ユダヤ人の世俗的な役割を問題にした点にあった。「ユダヤが西洋を征服し、とりわけドイツを新パレスチナにした時の武器は、実利主義的な悪徳商法精神が持つ策略と抜け目なさであった」とマルが述べているように、<sup>64)</sup>マルによれば、ヨーロッパ、とりわけドイツが「ユダヤ化」されたのは、ユダヤ人の商業的成功のためであったという。

ユダヤ人を抜け目のない商人と同一視するマルの態度は、シェイクスピアの『ベニスの商人』にも見られるような伝統的なユダヤ人嫌いとは異なるように見えるが、マルの反セム主義は19

世紀後半の社会を背景にして理解されなくてはならない。マルは次のように述べている。「我々が目の当たりにしているのは、イスラエルが19世紀における指導的な社会的・政治的大権力となったという歴史的事実である。我々にはもはや自らを脱ユダヤ化する身体的・知的能力は残されていない。社会の現実的なユダヤ化に対する粗野で暴力的、完全に無自覚的な抗議は社会民主主義であった。しかし社会民主主義はユダヤ人と通じている。なぜならユダヤは彼らの隊列にも侵入していたからである。事実、ドイツ社会民主党の創始者ラサールはセム人であった。」<sup>65)</sup> 19世紀の指導的な社会的・政治的権力となり、社会民主主義によって批判されていたのは資本主義だったのだから、マルはユダヤ人を資本主義と同一視している。資本主義をユダヤ人と同一視すると同時に社会民主主義をもユダヤ人と看做したマルが代表しようとしたのは、資本主義の下で没落を運命づけられた手工業者の利害であった。マルは次のように述べている。ユダヤ人は「商業において決定的な地位を獲得し、「汝には彼らが昔から嫌っていた厳しい手工業を除けばほとんど何も残さなかった」と。<sup>66)</sup> マルに続いて反セム主義の煽動を始めたプロテスタントの宮廷説教師シュテッカーも「手工業者の問題」という演説において手工業者の利害を代弁している。「我々が求めるのは」「今世紀の精神に立脚し、現代の手段と力をすべて備えたツンプトである」と。<sup>67)</sup>

反セム主義が小ブルジョア・イデオロギーであることをドイツの社会民主主義者たちはただちに認識した。エンゲルス [Friedrich Engels: 1820-1895] が反セム主義を政治的に理解し、「保守派を当選させるための選挙策動」<sup>68)</sup> と看做したのに対して、ベルンシュタイン [Eduard Bernstein: 1850-1932] は次のように指摘している。「ユダヤ人に対する煽動」は「農民、手工業者、官吏、教師等」<sup>69)</sup> の不満を反映しているのだと。反セム主義は小ブルジョアの不満を反映しているというベルンシュタインの理解はドイツの社会民主主義者に共有され、1893年ケルン党大会で採択された「社会民主主義と反セム主義」に関する決議において次のように定式化された。「反セム主義は、資本主義的發展によって抑圧されていると感じ、部分的にはこの發展によって没落を宿命づけられたブルジョアの諸階層の不満から生じる。」<sup>70)</sup> ドイツ社会民主党は反セム主義を資本主義的發展に抵抗する小ブルジョアのイデオロギーと認識していた。ローゼマリー・ロイシェン・ゼッペルが述べているように、ドイツ社会民主党の反セム主義理解は「今日の反セム主義研究の認識と重なり合う。」しかし、このような認識を提供することができる社会民主党の強みは同時に同党の「弱さ」でもあった。<sup>71)</sup> というのも反セム主義の階級的基盤を小ブルジョアに見た社会民主党の認識は危険な論理的帰結に導いたからである。第一の危険な論理的帰結は、ユダヤ人に対する反セム主義の攻撃が、資本家に対する小ブルジョアの階級闘争にすぎないなら、この所有階級間の階級闘争において労働者は中立を守るべきだという中立主義である。フランツ・メーリング [Franz Mehring: 1846-1919] は、自由主義を「親セム主義」と呼び、反セム主義よりも親セム主義との闘争を重視し、次のように述べていた。「反セム主義が行為よりもむしろ言葉によってユダヤ人に対して犯す残虐さ」故に、親セム主義が「言葉よりもむしろ行為によって犯す残虐さ」を見逃すことはできないと。<sup>72)</sup> この当時のドイツにおいては『寛容令』<sup>73)</sup> によってユダヤ人に市民的平等が認められており、「言葉によってユダヤ人に対して犯す残虐さ」を見逃すとすれば、それが民主主義に反する振舞いであることは明らかだったはずである。ドイツ社会民主党による反セム主義の認識から導かれたもう一つの危険な論理的帰結は、反セム主義とは、搾取が資本主義そのものに由来することを理解せず、ユダヤ人にのみ戦いを挑む「愚者の社会主義」<sup>74)</sup> であり、必要なことは、ユダヤ人にのみ向けられた大衆の怒りを資本主義一般に向け変えさせることだけだという議論である。このような考え方に基づけば、反セム主義は社会主義の露払いをしていることになる。ケルン党大会の決議では次のように定式化されている。反セム主義は「結局のところ革命的に作

用する。なぜなら反セム主義によってユダヤ人資本家に対して扇動された小ブルジョア層と小農民層は、ユダヤ人資本家だけでなく全資本家階級が彼らの敵であり、彼らをその悲惨から解放することができるのは社会主義の実現だけだという認識に到達せざるを得ないからである。<sup>75)</sup> 同様にオーストリア社会民主党のアドラーも次のように述べていた。反セム主義者は「社会民主主義の仕事」<sup>76)</sup> をしているのだ、と。このように反セム主義を「愚者の社会主義」として容認することには異論も存在した。ベルンシュタインはカウツキー宛の書簡において次のように述べている。「今日の反セム主義者にとってユダヤ資本は単なる口実にすぎない。可能な限りすべての職業からユダヤ人の競争手を排除するためのデマゴギー的手段なのだ」<sup>77)</sup> と。またエンゲルスもひどく搾取されているユダヤ人労働者の存在を指摘し、「それなのに我々は資本に対する闘争として反セム主義を進めるべきだというのだろうか。」<sup>78)</sup> と強く抗議している。

カウツキーは自伝において次のように書いている。「少年時代から今日に至るまで私は常に反セム主義から完全に自由だったし、ユダヤ人が迫害されていたところでは常にあたたかな共感を持って彼らの側に立った」<sup>79)</sup> と。この言葉に偽りが無いことは彼の政治姿勢から論証されると思われる。もちろん若いころから社会主義運動に参加していたカウツキーが、反セム主義に対する態度を他の社会主義者と共有していたとしても驚くにはあたらない。1882年、カウツキーは『ゾツィアルデモクラート』紙においてハンガリーの反セム主義について次のように書いている。「人民は個別的な個人ではなく全システムと、その意識的な担い手と闘わなくてはならない。」<sup>80)</sup> ここでカウツキーは反セム主義に影響された人民が個人としてのユダヤ人ではなく、資本主義システムと闘うことを期待している。しかし翌1883年には「愚者の社会主義」論が現れる。1883年にカウツキーはオーストリアの労働者にあてた宣言を執筆し、そこで次のように述べている。「反ユダヤ煽動が露わにしたのは、新しい社会の産声ではなく、古い社会の死の痙攣である。反ユダヤ煽動は力を増して繰り返されるだろうし、繰り返されざるを得ない。それはユダヤ人だけでなく、すべての所有者に向けられるだろう、」と。<sup>81)</sup> ここでカウツキーが反セム主義を「愚者の社会主義」と看做していることは疑い得ない。とはいえ、反セム主義に対するカウツキーの態度は例えばフランツ・メーリングとは明らかに調子が異なる。メーリングは、「社会主義の立場からすると、反セム主義の相対的な成長が歴史的・経済的發展における進歩であることは疑いない」<sup>82)</sup> と述べて、反セム主義の進歩的性格を強調したが、カウツキーは『ゾツィアルデモクラート』紙において次のように述べていた。「大衆が人種や宗教にかかわらずなく、すべての社会的寄食者を攻撃するのではなく、職業にかかわらずすべてのユダヤ人を攻撃しているという点にこの運動全体の不健全さが表れている」と。<sup>83)</sup> カウツキーは表面上、「愚者の社会主義」という反セム主義理解を支持していたとしても、反セム主義の危険性を過小評価していたわけではない。またカウツキーはオーストリアの労働者の特殊性故に反セム主義が持ちうる危険性にも気づいていた。カウツキーはエンゲルスに宛てて書いている。「当地の労働者は小ブルジョア的な思想圏のなかで成長してきたので小ブルジョア的な本能が非常に強いのです。」<sup>84)</sup> だからこそ「反セム主義は我々の最も危険な敵であり、ドイツにおける以上に危険」であるとカウツキーは主張したのである。<sup>85)</sup> 多くの社会民主主義者が反セム主義を「愚者の社会主義」として容認していたのに対して、カウツキーは反セム主義を「最も危険な敵」と看做していたとすれば、根底においては抑圧されたユダヤ人の側に立っていたと言えるのではないだろうか。このような立場を取ることができたのは、「今日の状況下では、いかなる反セム主義に対しても親セム主義者であることが私にとって定言命法である」と主張したベルンシュタインや、<sup>86)</sup> そのベルンシュタインによれば、「ユダヤ人がユダヤ人として抑圧されているところでは、階級的立場にかかわらず抑圧された者の側に立った」<sup>87)</sup> とされるエリノ

ア・マルクス [Eleanor Marx: 1855-1898] など一握りの社会主義者に限られていた。このような意味において、カウツキーの態度は、ジャック・ジェイコブズが主張しているように、ベルンシュタインやエンゲルスのそれに似ていると言えよう。<sup>88)</sup>

反セム主義に対するカウツキーの態度はドレフュス事件に対する対応からも見て取れると思われる。ドレフュス事件に対する社会主義者の対応は分かっていた。ローザ・ルクセンブルク [Rosa Luxemburg: 1871-1919] によれば、目下のフランスの危機に根底に存するのはブルジョア権力としての共和国と軍部の闘争であって、それが表現しているのは「社会が崩壊に向かっている」ということである。ルクセンブルクにおいてドレフュス事件はこのような観点から評価され、ドレフュス事件はフランス軍が患う政治的・道徳的化膿を膿瘍のように外部に表現している限りで大きな意味を有しているにすぎないという。<sup>89)</sup> エンツォ・トラヴェルソが指摘しているように、軍国主義の危険に比べると、「反セム主義は何かほとんど重要ではないものに縮小化されている」と言えよう。<sup>90)</sup> このような態度はルクセンブルクに限られない。ヴィルヘルム・リープクネヒトは、「ドレフュス大尉の無罪を信じていない」とまで述べている。<sup>91)</sup> リープクネヒトによれば、「単なるユダヤ人嫌いからユダヤ人ドレフュスが悪魔島に送られたというのはあらゆる心理学と健全な人間理解力に反する」し、<sup>92)</sup> ドイツでそのようなことを語る人物を私は「狂人と看做すだろう」という。<sup>93)</sup> リープクネヒトによれば、スパイに関しては無罪のものは直ちに釈放されるという不文律があり、5年も悪魔島に収監されたドレフュスは無罪ではないと結論したというのだ。<sup>94)</sup> フランス社会党もドレフュスには冷淡であった。ゾラやクレマンソーのような個人がドレフュスに味方することはできるが、「一政党が一個人の立場に身を置くことはできない」というのである。<sup>95)</sup> これに対してフランスの社会主義者ジャン・ジョレス [Jean Jaurès: 1859-1914] は、ドレフュス事件においてはプロレタリアがかかわっているわけではないし、ブルジョアのことはブルジョアが面倒を見ればよいという立場を拒否し、次のように主張した。「もしドレフュスが不当に非難されているなら、彼をまだ特権階級に数えるとはなんと滑稽なことだろう。」彼はもはや軍の者でも、支配階級の一員でもない。「彼は極度の人間的苦悩の一例であり、軍の虚偽、政治的卑劣、権力の犯罪の生き証人」であり、そのようなものとして「革命の一要因」であると主張していた。<sup>96)</sup> 社会主義者の対応がこのように分かれたなかでカウツキーは断固としてジョレスの立場を支持した。カウツキーは「ドレフュス事件においてフランス社会主義の名誉を救った」ジョレスに深い敬意を表明し、次のように述べている。「全国民をかき回した危機において中立であること以上に戦う階級にとって致命的な態度を私は考えることができません、」と。<sup>97)</sup>

カウツキーが反セム主義に妥協していたとは考えにくいのではないだろうか。それだけではない。カウツキーは生涯を通じてユダヤ人と友好的な関係を維持していた。プラハ時代のカウツキー家の最も親しい友人の一人は熱狂的な芸術愛好家のユダヤ人の銀行職員であり、ギムナジウムでは数多くの愛すべきユダヤ人生徒と知り合ったという。<sup>98)</sup> しかもカウツキーは、ユダヤ人ではなかったにもかかわらず、ユダヤ人に対する抑圧を自ら経験しているのである。プラハで生まれ育ちウィーンに移り住んでからもプラハ・ドイツ語を使い続けたカウツキーは、その発音故に「ユダヤ系」と嘲笑され、見下されたという。<sup>99)</sup> 自らの言語故に嘲笑されるという経験を持つカウツキーが「『美しい』ドイツ語を話す規範の意識」からイディッシュ語を蔑むと考えることはできるだろうか。成人してからもユダヤ人との友好関係は続く。1880年代初頭のスイス時代にカウツキーはカール・ヘヒバルク [Karl Höchberg: 1853-1885] が編集していた『社会科学並びに社会政策年報』のためにユダヤ人問題に関する論文を書き、ヘヒバルクはカウツキーが望むなら印刷しても良いと伝えたが、その場合は多くの異議申し立てをしなくてはならないと述べた。というのもカウツ

キーがユダヤ人に関してあまりに好意的な見解を持っていたからだという。<sup>100</sup> カウツキーは1914年の論考『人種とユダヤ』においてヴェルナー・ゾンバルト [Werner Sombart: 1863-1941] の反ユダヤ的な著作『ユダヤ人と経済生活』における虚偽と詭弁を厳しく批判し、嘲笑した。<sup>101</sup> マルティン・ブーバーが編集する『ユダヤ人』誌はカウツキーの論考に書評を寄せ、「ゾンバルトの反セム主義的な態度」を叱責したことに「感謝したい」と述べている。<sup>102</sup> 1929年、老カウツキーはユダヤ系の新聞において次のように語っている。カウツキー自身はユダヤ系ではなかったが、「ユダヤ人に対する友好的な関係のために」社会主義者の間で「名誉ユダヤ人」というあだ名が与えられたのだと。<sup>103</sup> しかしユダヤ人に対する友好的な関係を何よりも雄弁に語っているのは、彼の私生活であろう。なにしろ、カウツキーが結婚した二人の女性はどちらもユダヤ人だったのだから。<sup>104</sup> とりわけカウツキーの二番目の妻ルイーゼ・カウツキー [Luise Kautsky: 1864-1944] は、カールが発表する論文をすべて発表前に読み、論評しており、それ故、「ユダヤ人に関するカールの見解はルイーゼのそれと一致していた」と推定される。<sup>105</sup> 「墮落したドイツ語」という表現も、ユダヤ人女性ルイーゼの了承を受けていたとすれば、ユダヤ人に対する敵対的な態度の現れと看做すのは困難であろう。

#### IV. カウツキーの民族理論とユダヤ人

カウツキーの発言がドイツ・ナショナリズムやユダヤ人に対する敵対的な態度から説明できないとすれば、それはやはりマルクスかエンゲルスに由来すると考えるべきではないだろうか。上述したように反セム主義の疑いさえかけられたマルクスなら、ユダヤ人の言語を攻撃したとしても驚くにはあたらない。事実、エンゲルスは『ドイツにおける革命と反革命』において東欧ユダヤ人の言語を「恐ろしく墮落したドイツ語」horribly corrupted Germanと呼んでいるのである。<sup>106</sup> この論文はマルクスの名前で発表され、長い間、忘れられていたが、1896年、カウツキーによってドイツ語に翻訳され、corrupted Germanはverdorbenes Deutschと訳されたのである。<sup>107</sup>

「墮落したドイツ語」という表現がエンゲルスに由来するとしても、カウツキーが敢えてこの表現を利用した理由も説明されなくてはならないだろう。上述したように、それはドイツ・ナショナリズムや反セム主義ではありえない。そうだとすれば、その原因はやはりカウツキーの民族理論にあると考えるべきであろう。若きマルクスはユダヤ人の民族性を「キメラ的」と呼んだことがあるが、<sup>108</sup> カウツキーはしばしばユダヤ人を端的に「民族」と特徴づけてきた。1890年の論文「ユダヤ人」において彼は古代のユダヤ人を民族と呼んでいる。「ユダヤ民族Nation」は小なりといえども、経済と哲学の点で他の文化人民に匹敵するようになり、全般的なヘレニズム化とローマ化の最中であって「民族性Nationalität」を失わなかった唯一の種族である、と。<sup>109</sup> またシオニズムの機関誌『ヴェルト』誌が主張するように、1905年の論文「イギリスにおけるユダヤ人プロレタリアートの諸問題」においてカウツキーは「ユダヤ人の民族性を承認」したように見える。「どの民族Nationalitätも心理的・身体的固有性を有しており、」ユダヤ人のそれは「抽象的なもの」「批判的思想」の才能である、とカウツキーは述べているからである。<sup>110</sup> しかしカウツキーは「どの民族も心理的・身体的固有性を持つ」と述べているだけで、「心理的・身体的固有性」を持つ集団はみな民族であると述べているわけではないから、ユダヤ人は民族であるとはっきりと述べているわけではない。むしろカウツキーはユダヤ人を民族と看做すべきかどうか迷っているように見える。この逡巡を端的に示しているのが『ライプツィガー・フォルクス・ツァイトUNG』に掲載された論文「ロシアにおける民族問題」の一節である。カウツキーによれば、「民族とは様々な

時代に様々な条件から生じる社会的形成物であり、様々な姿を取り、常に歴史的な流れのなかにある。」<sup>111)</sup>したがって、「今日の文化的諸人民の下においてさえ、民族Nationalitätの概念は、その社会的発展に応じて極めて多様であり、「フランス、アイルランド、オーストラリア、ユダヤ、アルメニア民族はそれぞれ全く異なるものを意味している」という。<sup>112)</sup>ここでユダヤ人は確かに民族の一つに数えられてはいるものの、それはフランス人やアイルランド人とは別の意味においてだ、というのである。カウツキーが繰り返し主張してきたように、カウツキーによれば、「民族の最も重要な指標」は「言語」であった。<sup>113)</sup>カウツキーがユダヤ人を民族と呼ぶのに躊躇したのはユダヤ人が共通の言語を持っていなかったからだろう。確かに、同じ言語を話すものがみな同じ民族に属するわけではないが、同じ民族の構成員はみな同じ言語を話しているのではなくてはならない。なぜなら「言語は最も重要な社会的紐帯」であり、「言語共同体なしにはいかなる社会的協働も不可能」だからである。<sup>114)</sup>共通の言語を持たないユダヤ人をカウツキーが民族と呼ぶべきか躊躇したとしても驚くには値しない。

ユダヤ人を民族と看做すことが困難であるとすれば、ユダヤ人はどのように特徴づけられるだろうか。カウツキーは次のように述べている。「中世においてユダヤ人であるということは特定の民族Nationの一員であるということだけでなく、特定の職業の一員であるということも意味した。ユダヤ人であるということは高利貸しであるということであり、逆もまたそうであった」と。<sup>115)</sup>また1903年の論文「キシニエフの虐殺とユダヤ人問題」では民族としてのユダヤ人と職業としてのユダヤ人の関係を明らかにしようとしている。カウツキーによれば、母国のユダヤ人が死に絶え、異国の植民者だけが残された時に、「ユダヤ人は民族であることを止めた」という。「領土のない民族は考えられないからである。」ユダヤ人は異邦人として専ら都市に居住し、「貨幣と商品を扱う商人と知的職業」がユダヤ人全体の職業となったという。<sup>116)</sup>ユダヤ人がフランス人やアイルランド人とは異なる意味においてではあれ、民族であり、同時に「商人と知的職業」という特定の階級と重なるとすれば、カウツキーのユダヤ人理解は、「階級概念は決して民族概念と矛盾しない」と主張したアブラハム・レオン [Abraham Léon: 1918-1944] の「民族階級」概念を明らかに先取りしている。<sup>117)</sup>しかしカウツキーは「民族階級」という新概念を創り出すのではなく、ユダヤ人が民族なのか、階級なのか模索を続ける。1905年の論文「ロシアにおける民族問題」においてカウツキーはユダヤ人を民族と呼んでいたが、答えは簡単には出なかったようだ。ユダヤ人を民族と規定すべきか、階級とすべきかというカウツキーの迷いを示すテキストがもう一つある。それは1906年に執筆された『共産党宣言』イディッシュ語版へのカウツキーの序文である。イディッシュ語版という専ら東欧ユダヤ人を読者として想定した書籍においてカウツキーはユダヤ人を階級とも民族とも規定しなかっただけでなく、そもそもユダヤ人に一切言及していないのである。<sup>118)</sup>これはいささか奇妙である。『宣言』の各国語版への序文においては当該民族の労働者階級の特殊な課題について言及されることも稀ではないからである。<sup>119)</sup>そのような先例にもかかわらず、イディッシュ語版への序文においてカウツキーが東欧ユダヤ人労働者の特殊な課題について言及しなかったのは、ユダヤ人が民族であるのか階級であるのかカウツキーが結論できていなかったからであろう。

しかしカウツキーはしだいに「ユダヤ人は階級である」という規定に傾いていく。1914年の論考『人種とユダヤ』においてカウツキーは述べている。今日ユダヤ人は「民族であることを止めている」と。「領土の共通性」や「言語の共通性」のような「民族の本質をなすものがすべてユダヤ人には失われている」からである。<sup>120)</sup>周囲の言語を受け入れた西ヨーロッパのユダヤ人はもはや民族ではないと言えるとしても、「固有の言語によって周囲のスラヴ人から切り離されてい

る」<sup>121)</sup> 東欧ユダヤ人は民族と看做せないのだろうか。東欧ユダヤ人は言語によって周囲のスラヴ人から区別されているだけではない。彼らはイディッシュ文学, イディッシュ劇場, イディッシュ語の新聞を生み出しており, これをカウツキーは「ロシア・ユダヤ人の活発な民族的生活の産物にして手段」と呼んでいる。<sup>122)</sup> 1921年に刊行された『人種とユダヤ』第二版においてカウツキーは言語としてのイディッシュ語について考察し, イディッシュ語が東欧ユダヤ人の民族的生活の手段となり得た理由をイディッシュ語の特質から説明している。イディッシュ語がこのような役割を果たすことができるのは, 「それが話されるときではなく, 書かれるときである。それはヘブライ文字で書かれたドイツ語だからである。」<sup>123)</sup> イディッシュ語はヘブライ文字で書かれることによってはじめてドイツ語から区別され, 民族言語という仮象を生み出すというのだ。ここでカウツキーは東欧のユダヤ人が「民族的生活」を送っていることを一度は認めつつも, 「ユダヤ民族」は「仮象」にすぎないという。<sup>124)</sup> 何故「ユダヤ民族」が「仮象」にすぎないのか。カウツキーが以前から認めてきたように, ロシアのユダヤ人は, 西ヨーロッパのユダヤ人とは異なり, 資本家と知識人だけでなく, 手工業者やプロレタリアートをも含む都市の諸階級すべてを包摂しており,<sup>125)</sup> このようなユダヤ人を単に「階級」と呼ぶことはできないはずである。しかしカウツキーによれば, 狭い空間に強制的に押し込まれていることによって「ユダヤ民族という仮象」が生み出されているのであり, それは同時にユダヤ人の悲惨さも生み出している。ユダヤ人が解放されるなら, ユダヤ人の悲惨さとともにユダヤ民族の条件も消滅する。かくしてユダヤ人の解放は「ユダヤ人の解体」を意味するという。ロシア・ユダヤ人の「民族的生活」の産物としての文学, 劇場, 新聞を支えた「いわゆるイディッシュ語」は, ユダヤ人の民族性が「仮象」にすぎないが故に, 「ユダヤ民族的という仮象 jüdischnationalen Schein」を帯びているにすぎない「墮落したドイツ語」と特徴づけられることになるのである。<sup>126)</sup>

その後カウツキーは1936年に書き始めた『自伝』のような非政治的な著作においてユダヤ人を民族 Nation と呼んだことはあるが,<sup>127)</sup> 社会主義の出版物においてはユダヤ人を民族と看做していない。1929年の論文「シオニズムの展望」においてはこう述べている。「ユダヤ人は別個の民族 Nation として世界大戦を迎えたのではなかった。むしろ彼らの態度は, 「ユダヤ人が伝統的な固有性にもかかわらず, 彼らがそのもとで暮らす諸民族とどれほど融合しているかを示した」という。<sup>128)</sup> 1908年の論文「民族性と間民族性」においても階級としてのユダヤ人の規定がすでに前面に現れている。「中世においてユダヤ人が果たし, 今日でもなお東欧で果たしている役割を特徴づけようとするなら, 民族と呼ぶよりも, カーストと呼んだ方がうまくいく」というのである。<sup>129)</sup> ユダヤ人を階級ないしカーストと特徴づけたことから, カウツキーがイディッシュ語を「墮落したドイツ語」と呼んだ理由が明らかとなる。言語を民族の指標と看做す立場からすれば, 「ドイツ語を話すユダヤ人」は「ドイツ民族に帰属する」と考えられ,<sup>130)</sup> イディッシュ語(すなわちユダヤ語)を話す東欧ユダヤ人はユダヤ民族を形成することになる。しかしユダヤ人が民族ではなく, 階級ないしカーストであり, その民族性は仮象にすぎないとすれば, 彼らが話していることばは民族言語ではなく「非言語」<sup>131)</sup> としての「墮落したドイツ語」と特徴づけられなくてはならなかったのである。

## V. おわりに

カウツキーはどのような意味でドイツ人であり得ただろうか。彼の母はドイツ人であり, 彼の母語はドイツ語であった。そのドイツ語をカウツキーはチェコ語よりも上手に話したという。母

語であるドイツ語を上手に話したとしても、それだけでカウツキーがドイツ人になることはできなかった。彼はウィーンにおいてもブラハ風のドイツ語を保持していたため、その発音故に「ユダヤ人」ないし「チェコ人」という烙印を押されたのだった。この少年時代の経験を八十代になっても記憶していたカウツキーが、その発音故にユダヤ人の言語を「墮落したドイツ語」と看做すだろうか。抑圧に対する抵抗に敬意を払っていたためにカウツキーはかえってスラヴ系のチェコ人としての意識を持つようになった。しかもカウツキーはドイツ・ナショナリズムに対する批判的な態度を崩すことはなかった。ドイツ人でもありチェコ人でもあるというアイデンティティを持ち、自らの言語故に嘲笑された経験を持ち、ドイツ・ナショナリズムに常に批判的な態度を取っていたカウツキーが『美しいドイツ語』という規範の立場からユダヤ人の言語を見下すとは考えにくいのではないか。

ユダヤ人問題における立場からイディッシュ語に対するカウツキーの態度を説明することも困難であるように見える。反セム主義がユダヤ人の迫害を始めたときに多くの社会民主主義者が所有階級間の闘争において労働者は中立であるべきだと考え、また反セム主義を愚者の社会主義として大目に見ようとしていた時に、カウツキーは反セム主義を「最も危険な敵」と看做し、抑圧されたユダヤ人の側に立とうと努めていた。しかもカウツキーは私生活に至るまでユダヤ人との友好関係を生涯にわたって保持した。そうだとすれば、ユダヤ人に対する反感から「イディッシュ語」を「墮落したドイツ語」と呼んだとも考えにくい。

カウツキーがイディッシュ語を「墮落したドイツ語」と呼んだ原因がドイツ・ナショナリズムにもユダヤ人に対する反感にも見いだせないとすれば、やはり原因はカウツキーの民族理論であろう。カウツキーは民族を言語共同体と理解していたが、カウツキーにとってユダヤ人は民族ではなく階級ないしカーストであった、階級としてのユダヤ人の言語は民族言語ではありえず、イディッシュ語は非言語としての「墮落したドイツ語」と特徴づけられることになったのである。

## 注

- 1) Karl Kautsky, Nationalität und Internationalität, in: *Ergänzungshefte zur Neuen Zeit*, Nr. 1, 1908, S. 7.
- 2) Kautsky, Die moderne Nationalität, in: *Die neue Zeit*. 5.Jg., 1887, S. 448.
- 3) Ronald Löttsch, Vorwort, in: *Duden. Jiddisches Wörterbuch*, Leipzig et al. 1992, S. 5.
- 4) Salcia Landmann, *Jiddisch. Abenteuer einer Sprache*, München 1964, S. 11.
- 5) Solomon, A. Birnbaum, *Yiddish. A Survey and a Grammar*, Toronto, Buffalo, London 1978, p. 6.
- 6) Max Weinreich, *History of Yiddish Language*, Vol. 1, New Haven / London 2008, p. 321.
- 7) Heinrich Heine, Ueber Polen, in: ders., *Historisch-kritische Gesamtausgabe der Werke*, Bd. 6, S. 61
- 8) L.L.Hellwitz, *Die Organisation der Israeliten in Deutschland*, Magdeburg 1819, S. 45.
- 9) Ad. Jellinek, Die Juden in Oesterreich, in: *Der Orient. Berichte, Studien und Kritiken für jüdische Geschichte und Literatur*, hrsg. von Julius Fürst, Nr. 36, Leipzig 1848, S. 282.
- 10) Solomon A. Birnbaum, Die jiddische Sprache, in: *Ein Leben für die Wissenschaft. a.a.O.*, S.47.
- 11) *Theodor Herzls Tagebücher 1895–1904*, Berlin 1922, S. 195.
- 12) Theodor Herzl, *Der Judenstaat. Versuch einer modernen Lösung der Judenfrage*, Leipzig / Wien 1896, S. 75.
- 13) [Birnbaum], Der jüdische Jargon, in: *Selbst-Emanzipation*, Nr. 15. Vom 2. November 1890, III. Jg., Wien 1890.
- 14) Nathan Birnbaum, Der Zionismus als Kulturbewegung, in: ders., *Ausgewählte Schriften*, Band I., Czernowitz 1910, S. 70.
- 15) Nathan Birnbaum, Sprachadel, in: *Die Freistadt*, Jg.1, H. 2, 1913–14, S. 84.

- 16) Ленин, К Еврейским рабочим, В. И. Ленин, Сочинения, Издание четвертое, том 8, стр. 464.
- 17) Ленин, Положение Бунда в Партии, В. И. Ленин, Сочинения, Издание четвертое, том 6, стр. 84.
- 18) Henry J. Tobias, *The Jewish Bund in Russia from its Origin to 1905*, California 1972, p. 36.
- 19) Weinreich, *ibid.*, p. 321. そうだとすれば、ジャーゴン委員会という名称は、田中克彦氏が力説するほど、「自らの言語にかぶせられた最も差別的な表現を高々と掲げ、それを解放の導きの言語として宣言した」「しぶとい思想」の表現ではなかったのではないか。田中克彦『ことばと国家』岩波書店1981年189頁。
- 20) Max Zetterbaum, Probleme der jüdisch-proletarischen Bewegung, in: *Die Neue Zeit*, 19. Jg., Bd. 1, 1900-01, S. 369, S. 371.
- 21) Jindřich Grossmann, Židovská strana sociálně demokratická v Haliči, in: *Socialistická Revue Akademie*, Ročník X, Praha 1906, str. 17. ここで「ことば」と訳したのは řeč である。それは民族言語と看做され得る言語 jazyk やそれに従属した変異形としての方言とは異なり、社会的規定を捨象した概念として理解されている。またグロスマンは idiom という語も同じ意味で用いている。
- 22) Henryk Grossman, *Proletaryat wobec kwestyi żydowskiej z powodu niedyskutowanej dyskusji w „Krytyce“*, Kraków 1905, str. 43. 英語訳は žargon を言語 language と訳しているが、ここは文字通り「ジャーゴン」と理解すべきであろう。Cf. Henryk Grossman *Works*, Vol. 2, Political Writings, Edited and introduced by Rick Kuhn, Leiden/ Boston 2021, p. 61.
- 23) Yoysef Kisman, Di yidishe sotsial-demokratishe bavegung in galitsie un bukovine, in: G. Aronson u.a. (Hg.), *Di geshihkte fun bund*, Bd. 3, New York 1966, S. 416.
- 24) Otto Bauer, Galizische Parteitage, in: ders. *Werkausgabe*, Bd. 8, S. 588.
- 25) Otto Bauer, *Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie*, in: ders., *Werkausgabe*, Bd. 1, S. 421.
- 26) *Ebd.*, S. 432. ナータン・ビルンバウムとオットー・バウアーに関しては、勝又章夫「オットー・バウアーとユダヤ人問題」、『三田学会雑誌』2013年、106巻第3号を参照されたい。
- 27) Robert S. Wistrich, Social Democracy and the Problem of Galician Jewry, in: *Leo Baeck Institute Year Book*, Vol. 26, Issue 1, 1981, p. 116. もちろん例外は存在する。エンゲルベルト・パーナーストルファーは、「民族的存在へのユダヤ人の権利」は「民族自治」によって保障されると主張したことがある。Engelbert Pernerstorfer, Zur Judenfrage, in: *Der Jude*, I.Jg., H. 5, Berlin/Wien 1916, S. 313. ユダヤ人問題に対するパーナーストルファーの態度に関してポアレ・シオンの機関紙は次のように評している、「彼の何物にも曇らされることのない視点が」、「ユダヤ民族における新しい力、ユダヤ人プロレタリアートを民族的ルネサンスの主要な要因として認識」させ、それが「彼をとりわけオーストリア社会民主主義のユダヤ人指導者から区別した」と。Engelbert Pernerstorfer und die Judenfrage, in: *Der Jüdische Arbeiter*, 5. Jg., Nr.1. vom 1.Feb., Wien 1928, S. 2.
- 28) 1722 Entscheidung über eine Beschwerde wegen Verletzung des durch die Verfassung gewährleisteten politischen Rechtes auf Wahrung und Pflege der Nationalität, Erkenntnis vom 26. Oktober 1909, in: *Sammlung der nach gepflogener mündlicher Verhandlung geschöpften Erkenntnis des k. k. Reichsgerichtes*, XIV. Teil, 3. Heft, Jg. 1909, Wien 1912, S. 766.
- 29) Budapester Orpheus-Spaß vor dem Gericht, in: *Arbeiter Zeitung*, XXI. Jg. Nr. 299 vom 29. Okt. 1909.
- 30) Yoysef Kisman, Di yidishe sotsial-demokratishe bavegung in galitsie un bukovine, *op.cit.*, S. 427.
- 31) 田中克彦『言語の思想』岩波書店2003年、198頁。
- 32) Karl Kautsky, Erinnerungen und Erörterungen, 'S-Gravenhage 1960, S. 558.
- 33) Kautsky, [Autobiographie], in: *Die Volkswirtschaftslehre der Gegenwart in Selbstdarstellungen*, Leipzig 1924, S. 118.
- 34) *Protokoll über die Verhandlungen des Parteitages der deutschen sozialdemokratischen Arbeiterpartei in Oesterreich, abgehalten in Innsbruck vom 29. Oktober bis 2. November 1911*, Wien 1911, S. 129.
- 35) Kautsky, [Autobiographie], in: *Die Volkswirtschaftslehre der Gegenwart in Selbstdarstellungen*, Leipzig 1924, S. 118.
- 36) Karl Kautsky, Nationalität und Internationalität, a. a. O., S. 6.
- 37) Friedrich Hertz, *Staatstradition und Nationalismus*, Zürich 1937, S. 391.

- 38) Kautsky, *Erinnerungen und Erörterungen*, S. 91.
- 39) *Ebd.*, S. 455.
- 40) *Ebd.*, S. 456.
- 41) Kautsky an die Redaktion der Akademie Prag, ca Ende 1896 / Abfang 1897, in: Karl und Louise Kautsky *Briefwechsel mit der Tschechoslowakei 1879–1939*, hrsg. von Zdeněk Šolle, Frankfurt /New York 1993, S. 120.
- 42) *Protokoll über die Verhandlungen des Parteitages der deutschen sozialdemokratischen Arbeiterpartei in Oesterreich, abgehalten in Innsbruck vom 29. Oktober bis 2. November 1911*, Wien 1911, S. 129.
- 43) Kautsky, Viktor Adler. Erinnerungsblätter zu seinem 60. Geburtstag, in: *Die Neue Zeit*, 30. Jg., Bd. 2, 1912, S. 418.
- 44) *Ebd.*, S. 418/419.
- 45) Adler an Kautsky, Wien 21. August 1886, in: Victor Adler, *Briefwechsel mit August Bebel, und Karl Kautsky sowie Briefe von und an Ignaz Auer, Eduard Bernstein, Adolf Braun, Heinrich Dietz, Friedrich Ebert, Wilhelm Liebknecht, Hermann Müller und Paul Singer*, Gesammelt und erläutert von Friedrich Adler, Hrsg. vom Parteivorstand der Sozialistischen Partei Österreichs, Wien 1954, [以下 *Briefwechsel* と略称], S. 12.
- 46) *Ebd.*
- 47) Die Kapitulation der Meuterer, in: *Arbeiter-Zeitung*, XVII. Jg., Nr. 180 vom 2. Juli Wien 1905, S. 1.
- 48) Kautsky, Die Folgen des japanischen Sieges und die Sozialdemokratie, in: *Die Neue Zeit*, 22. Jg., Nr. 41, Stuttgart 1905, S. 464.
- 49) Adler an Kautsky, Wien 17. Juli 1905, in: Adler, *Briefwechsel*, S. 458.
- 50) Kautsky an Adler, Berlin-Friedenau, den 20. Juli 1905, in: Adler, *Briefwechsel*, S.461/462.
- 51) Richard Wagner, *Das Judenthum in der Musik*, Leipzig 1896, S. 15.
- 52) Zdeněk Šolle, Die Sozialdemokratie in der Habsburger Monarchie und die tschechische Frage, in: *Archiv für Sozialgeschichte*, Bd. VIVII, Hannover 1966/67, S. 339.
- 53) Karl Marx. Zur Judenfrage, in: Karl Marx, Friedrich Engels, *Gesamtausgabe* hrsg. vom Institut für Marxismus-Leninismus beim Zentralkomitee der Kommunistischen Partei der Sowjetunion und vom Institut für Marxismus-Leninismus beim Zentralkomitee der Sozialistischen Einheitspartei Deutschlands [以下 *MEGA*<sup>2</sup> と略称], 1. Abt., Bd. 2, S. 164/165.
- 54) Edmund Silberner, *Sozialisten zur Judenfrage*, Berlin 1962, S. 140.
- 55) *Ebd.*, S. 290.
- 56) *Ebd.*, S. 226.
- 57) Reinhard Rürup, Sozialismus und Antisemitismus in Deutschland vor1914, in: *Juden und jüdische Askekte in der deutschen Arbeiterbewegung 1848–1918*, hrsg. von Walter Grab, Tel Aviv 1977, S. 222.
- 58) Rürup, *Emanzipation und Antisemitismus*, Göttingen 1975, S. 111.
- 59) Rürup, Sozialismus und Antisemitismus in Deutschland vor 1914, *a.a.O.*, S. 222/223.
- 60) Der Umschwung in Berlin, in: *Allgemeine Zeitung des Judenthums*, 45. Jg., Nr. 4, 25. Januar 1881, S. 51.
- 61) August Bebel, Eine sozialdemokratische Antwort, in: ders., *Ausgewählte Reden und Schriften*, Bd. 2, 1. Halbband, Berlin 1978, S. 170/171.
- 62) Laurenz Demps, Paul Singer, Soziale Utopie und Arbeiterbewegung, in: *Juden und deutsche Arbeiterbewegung bis 1933, Soziale Utopien und religiös-kulturelle Traditionen*, hrsg. von Ludger Heide Arnold Paucker, Tübingen 1992, S. 107.
- 63) Wilhelm Marr, *Der Sieg des Judenthum über das Germanenthum*, Bern 1879, S. 38.
- 64) *Ebd.*, S. 11.
- 65) *Ebd.*, S. 32.
- 66) *Ebd.*, S. 31.
- 67) Adolf Stoecker, Zur Handwerkerfrage, in: ders., *Christlich-Sozial. Reden und Aufsätze*, Bielefeld / Leipzig 1885, S. 340.

- 68) Engels an Bernstein, Bridlington Quay, 17. August 1881, in: *Eduard Bernsteins Briefwechsel mit Friedrich Engels*, Assen 1970, S. 28/29.
- 69) Bernstein an Engels, Zürich, 9. September 1881, in: *Eduard Bernsteins Briefwechsel mit Friedrich Engels*, S. 37.
- 70) *Protokoll über die Verhandlungen des Parteitages der Sozialdemokratischen Partei Deutschlands. Abgehalten zu Köln a. Rh. vom 22. bis 28. Oktober 1893*, Berlin 1893, S. 293/294.
- 71) Rosemarie Leuschen-Seppel. Arbeiterbewegung und Antisemitismus, in: *Antisemitismus. Von religiöser Judenfeindschaft zur Rassen. ideologie*, hrsg. von Günter Brakelmann / Martin Rosowski, Göttingen 1989, S. 86.
- 72) Franz Mehring, Anti- und Philosemitisches, in: *Die Neue Zeit*, Jg. 9, Bd. 2, Nr. 45, 1890/1891, S. 587.
- 73) Gesetz, betreffend die Gleichberechtigung der Konfessionen in bürgerlicher und staatsbürgerlicher Beziehung vom 3. Juli 1869, in: Ismar Freund, *Die Emanzipation der Juden in Preußen*, Bd. 2, Berlin 1912, S. 522.
- 74) ベーベルによると, 「愚者の社会主義」という表現はフェルディナント・クローナヴェッターに由来するという。Hermann Wahr, *Der Antisemitismus. Ein internationales Interview*, Berlin 1894, S. 21.
- 75) *Protokoll über die Verhandlungen des Parteitages der Sozialdemokratischen Partei Deutschlands. Abgehalten zu Köln a. Rh. vom 22. bis 28. Oktober 1893*, S. 224
- 76) Viktor Adler, Antisemitismus, in: ders., *Aufsätze, Reden und Briefe*, Heft. VIII, S. 348.
- 77) Bernstein an Kautsky, 2. Mai 1893, in: Till Schelz-Brandenburg (Hg.), *Eduard Bernsteins Briefwechsel mit Karl Kautsky (1891–1895)*, Frankfurt am Main 2011, S. 190/191.
- 78) Engels, Über den Antisemitismus, *MEW*, Bd. 22, S. 50.
- 79) Karl Kautsky, *Erinnerungen und Erörterungen*, S. 179.
- 80) Annoym[Kautsky], Oesterreich-Ungarn, in: *Der Sozialdemokrat*, Nr. 41, vom 5. Okt. 1882.
- 81) Ludwrig Brügel, *Geschichte der österreichischen Sozialdemokratie*, Bd. III, S. 320.
- 82) Mehring, Das erste Wahlergebnis, in: *Die Neue Zeit*, 11. Jg., Bd. 2, Nr. 40, 1892/1893, S. 389.
- 83) Annoym[Kautsky], Oesterreich-Ungarn, in: *Der Sozialdemokrat*, Nr. 41, vom 5. Okt. 1882.
- 84) Kautsky an Engels, Wien 22. Dezember 1884, in: Kautsky, *Aus der Frühzeit des Marxismus, Engels Briefwechsel mit Kautsky*, hrsg. von Kautsky, Prag 1935, S. 160.
- 85) Kautsky an Engels, 23. Juni 1884, in: *Aus der Frühzeit des Marxismus. Engels Briefwechsel mit Kautsky*, hrsg. von Kautsky, Prag 1935, S. 122.
- 86) Bernstein, Das realistische und das ideologische Moment im Sozialismus, in: *Die Neue Zeit*, 16. Jg., Bd. 2, Nr. 34, 1897/1898, S. 232. ユダヤ人問題に対するベルンシュタインの態度に関しては, 勝又章夫「エドゥアルト・ベルンシュタインとユダヤ人問題」, 『史学』三田史学会編, 第八五巻, 第一～三号, 第二分冊, 二〇一五年を参照されたい。
- 87) Bernstein, Eleanor Marx, in: *Die Neue Zeit*, 16. Jg., Bd. 2, Nr. 30, 1897/1898, S. 122.
- 88) Jack Jacobs, Marxism and Anti-Semitism: Kautsky's Perspective, in: *International Review of Social History*, Vol. 30, Nr. 3, Cambridge 1985, p. 401.
- 89) Rosa Luxemburg, Die Krise in Frankreich, in: dies., *Gesammelte Werke*, Bd.1, 1. Halbband, S. 264/265.
- 90) Enzo Traverso, *The Marxists and the Jewish Question. The History of a Debate 1843–1943*, New Jersey 1994, p. 67
- 91) Wilhelm Liebknecht, Nachträgliches zur Affaire, in: *Die Fackel*, Nr. 18, Wien 1899, S. 1.
- 92) *Ebd.*, S. 3.
- 93) *Ebd.*, S.4.
- 94) *Ebd.*, S.5.
- 95) Ch. Bonnier, Die Dreyfus-Affair und die französische Sozialisten, in: *Die neue Zeit*, 16. Jg., 1. Bd., Stuttgart 1898, S. 696. フランス社会党の戦術に対して『ノイエ・ツァイト』編集者カウツキーは次のようにコメントしている。「国内政治の問題であっても, その射程が国境を越えて広がる」ならば, 外国の社会主義者がフランスの同志とは異なる態度をとることもあると。これはドレフュス事件に対するフラン

- ス社会党の態度にカウツキーが同意していなかったことを示しているのではないだろうか。 *Die neue Zeit*, 16. Jg., 1. Bd., Stuttgart 1898, S. 698
- 96) Jean Jaurès, L'interêt socialiste; *La Petite République*, 10, Août 1898.
- 97) Karl Kautsky, Jaurès Taktik und die deutsche Sozialdemokratie, in: *Vorwärts*, 16. Jg., Nr. 172. vom 26. Juli 1899. クルト・コシークは「ドレフュス事件期の社会民主主義と反セム主義」に関する研究において、唐突に1921年のカウツキーの著作『人種とユダヤ』第二版から同化によるユダヤ人問題の解決というカウツキーの思想に言及し、あたかも、「ドレフュスの無罪を信じていない」というリーブクネヒトや90年代になっても「ユダヤの悪徳商人」という言葉を使っていたフランツ・メーリングと同様にカウツキーも反セム主義に妥協していたかのように論じているが、カウツキーがジャン・ジョレスへの支持を表明していたという事実を無視しては公平な判断とは言えないだろう。 Kurt Koszyk, *Sozialdemokratie und Antisemitismus zur Zeit der Dreyfus-Affäre, in: Juden und deutsche Arbeiterbewegung bis 1933. Soziale Utopien und religiös-kulturelle Tradition*, hrsg. von Ludger Heid und Arnold Pauker, Tübingen 1992
- 98) Kautsky, *Erinnerungen und Erörterungen*, S. 211.
- 99) *Ebd.*, S. 105.
- 100) *Ebd.*, S. 422.
- 101) Kautsky. Rasse und Judentum, in: *Ergänzungshefte zur Neuen Zeit*, Nr. 20, Stuttgart 1915, S. 52/53.
- 102) Ellas Auerbach, Rassenkunde, in: *Der Jude. Eine Monatsschrift*, 6. Jg., Berlin 1921/1922, S. 385.
- 103) Karl Kautsky, der „Ehrenjude“, in: *Die Stimme. Jüdische Zeitung*, 2. Jg., Nr. 65. vom 28. März, Wien 1929, S. 7.
- 104) Jacobs, Marxism and Anti-Semitism: Kautsky's Perspective, *op.cit.*, p. 429.
- 105) Günter Regneri, *Luise Kautsky, Seele des internationalen Marxismus, Freundin von Rosa Luxemburg*, Berlin 2013, S. 55.
- 106) Friedrich Engels, Revolution and Counter-Revolution in Germany. *MEGA*<sup>2</sup> 1. Abt., Bd. 11, S. 41. / Karl Marx [Friedrich Engels], Revolution and Counter-Revolution, in: *New-York Daily Tribune*, Vol. XI, No. 3, 403, March 5. 1852, p. 7.
- 107) Marx [Engels], *Revolution und Kontre-Revolution in Deutschland*, ins Deutsche übertragen von K. Kautsky, Stuttgart 1896, S. 59.
- 108) Marx, Zur Judenfrage, *MEGA*<sup>2</sup> 1. Abt., Bd. 1, S. 167.
- 109) Kautsky, Das Judentum, in: *Die Neue Zeit*, 8. Jg., Stuttgart 1890, S. 27.
- 110) Karl Kautsky über Judentum und Jüdisches Proletariat, in: *Die Welt*, 9. Jg., Nr. 50, Wien 1905, S. 4.
- 111) Kautsky, Die Nationalitätenfrage in Rußland, in: 4. Beilage zu Nr. 98 der *Leipziger Volkszeitung*, Sonnabend, 29. April, 1905.
- 112) *Ebd.*
- 113) Kautsky, Die Krisis in Österreich, in: *Die Neue Zeit*, 22. Jg., Bd. 1, Stuttgart 1903–1904, S. 39.
- 114) Kautsky, Nationalitätenfrage in Russland, *a.a.O.*
- 115) S. [Kautsky], Das Judentum, *a.a.O.*, S. 28.
- 116) Kautsky, Das Massaker von Kischeneff und die Judenfrage, in: *Die Neue Zeit*, 21. Jg., 2.Bd., Stuttgart 1903, S. 305.
- 117) Abraham Léon, *Die jüdische Frage. Eine Marxistische Darstellung*, Essen 1995, S. 16.
- 118) Kautski, Forvort, in: Marks, Engels, *Der kommunistischer manifest*, Warszawa 1919.
- 119) 例えば1882年のロシア語版へのマルクスとエンゲルスの序文においては、「ロシア革命が西欧におけるプロレタリア革命のシグナルとなり、両者が補いあうならば、今日のロシアにおける土地の共同所有は共産主義的發展の出発点となりうる」と主張されていたし、Marx, Engels, Vorrede [zur russischen Ausgabe von 1882], *MEW*, Bd. 4, S. 576. 1892年のポーランド語版への序文において、「独立した強力なポーランドの再建はポーランド人のみならず、我々すべてに関わる事柄である」とエンゲルスは主張している。 Engels, Vorrede [zur polnischen Ausgabe von 1892], *MEW*, Bd4, S. 588.
- 120) Kautsky, Rasse und Judentum, *a.a.O.*, S. 49

- 121) Kautsky, *Rasse und Judentum*, S. 70.
- 122) *Ebd.*, S. 92.
- 123) Kautsky, *Rasse und Judentum*, zweite durchgesehene und vermehrte Auflage, Stuttgart 1921, S. 93.
- 124) Kautsky, *Rasse und Judentum*, Stuttgart 1914, S. 93.
- 125) Kautsky, Das Massaker von Kischeneff und die Judenfrage, *a. a. O.*, S. 305.
- 126) Kautsky, *Rasse und Judentum*, zweite Auflage, Stuttgart 1921, S. 93.
- 127) Kautsky, *Erinnerungen und Erörterungen*, S. 47
- 128) Kautsky, Die Aussichten des Zionismus, in: *Arbeiter-Zeitung*, 42. Jg., Nr. 262. vom 22. September 1929, S. 4.
- 129) Kautsky, Nationalität und Internationalität, *a. a. O.*, S. 7.
- 130) *Ebd.*
- 131) Enzo Traverso, *The Marxists and the Jewish Question, The History of a Debate 1843–1943*, New Jersey 1990, p. 83.